
夜道

橋部流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜道

【Nコード】

N2576J

【作者名】

橋部流

【あらすじ】

人生に挫折して「なんとなく死にたい」気分の女子高生・明奈は一晚を道路で過ごすことになった。ひねくれ、夜の底で腐っている明奈は、通りすがりのホームレスに声をかけられる。道路に座って夜を見つめ、自分を見つめながら、少しずつ立ち直ってゆく明奈の、再生と成長の物語。

夜は狭い路地に深く根を下ろしていた。月も星も見えない、漆黒の夜だった。

わたしは夜が嫌いだ。特別に、はつきり、こうだから嫌だという理由があるのではなくて、ただぼんやりと嫌いだった。言い換えるなら感覚的に、である。そう、夜にはいつも不毛な感情ばかりが生まれる。さびしさ、虚しさ、退屈さ。わたしの心は、鋭さを失い、茶色く鈍りきった感情の吹きだまりだ。時々、あまりに身体が重くだるくなって、夜の中に浮き彫りになった怠慢な人間の姿と向き合わされると、わたしはいつか夜に押しつぶされてしまっくんじゃないかと恐怖する。

部活帰りの道路は暗かった。一直線の道の先は闇にまぎれていた。

夜である。灰色の空には厚く雲がたれこめていて、空気はしんなりと湿り気を帯び、昼過ぎまで降っていた雨のせいで道路には黒い水たまりがいくつかできていた。疲れ果て疲れ果て、この道路のはるか彼方にある家を探すのもだるくなって、わたしはさっきから足もとを眺めて歩くことにしている。暗闇に浮かぶ、沈黙して動き続ける四本の足。歩みの力強いのがヒカリで、それにならうように不器用な早足になっているのがわたしだ。制服のスカートから露出している膝には、時折、風がヒュウと吹きつけて冷たい。そしてもう十月、もう冬だと思つと、その早さにびっくりさせられる。時間と

いうものは年齢を重ねるにつれてだんだん早く感じるようになるらしいけれど、それは歳をとるにつれて一日一日の密度というものが小さくなり、毎日が薄っぺらになっていくからではないかと思うとやりきれない。今よりも中身のない生活が死ぬまで延々と続いているなんて、いや、でも、毎日が薄くなればそれだけ歳をとるのも早足になるのだから、だったらそう辛くはないかもしれない、なんて自虐。重暗い気持ちは埃がたまるように降り積もる。

「ねえヒカリ、このだるさ、なんなんだろ。なんとなく、死にたいなあっていうこのだるさ」

ふとそんなことを呟くとヒカリは無感動、抑揚のない声で言った。

「死にたいの？」

「まあね」

「だったら死ねばいいよ。自殺するのになぜ自殺したくなかったかなんて理由をうじうじ考え悩む必要なんてないから」

ヒカリはわたしに磨りガラスみたな瞳をちよつとだけ向けて、すぐに戻す。ヒカリはいつもこうだ。どこまでも涼やかで、格好いい。そして合理的だ。勉強方法も、人間関係も、食事や運動の量も、睡眠時間も、すべてが適切で、彼女の人生には無駄なものが何一つとしない。

わたしはそんな彼女に憧れた。質素なくせに満ち足りているなんて、まるでスーパースターだ。彼女みたいになりたい。と、じつはわたし、ある時、自分の中身のない薄っぺらな生活に嫌気がさして彼女のように有意義な日常を送れないものかと真剣に考えたことがある。なぜわたしの毎日は空っぽなのか、どうして彼女は充実した生活ができるのか、ようするにわたしには無駄な空白の時間が多い

のよ、と考えていて、とにかく、何もしないでぼーっとしている時間とか、横になってお菓子を貪りながらテレビを見ている時間とかを減らすよう、けっこう真面目に努力したのである。ところが、やってみるとこれが意外と難しく、わたしは真っ白い画用紙を目の前にした子供のように固まってしまった。だってその空白の時間に代わりに何をすればいいのかわからない、わたしは腐りきって眉間にしわを寄せ、勉強机に向かってはおおづえついて、何もできなかった。ひたすら過ぎゆく時間、時計のカチコチという音のいらだたしさに頭を掻きむしり、身体は火照り、焦りに追い立てられるようにして思った、わたしは何をやってるんだろう。有意義どころか時間を投げ捨てていて、充実感の代わりに得たのはやり場のない焦燥感だけで。その時によろやく、やっぱり自分はヒカリみたいにはなれない、とかなしく悟ったのだけれど、ところがこのわたし、できそこないのくせに未練だけは一人前にあるようで、どうにも諦めきれず、ヒカリがいつも隣にいるせいもある、ぐずぐず思い悩む。彼女がひとつ充実すれば、わたしにひとつ積もっていくのは、落胆、失望、そして濁った夜の感情。憂鬱で仕方がなく、きつとそんな苦悩がたまりにたまって死の香りを漂わせているんだろう、なんて、そんなことを端折りながらヒカリに話すと一蹴された。

「明奈はね、本当は死にたくないんだよ、それ」

「どういうこと」とわたしが尋ねると、ヒカリは大げさにため息をついて話し出した。

「気まぐれなの、あんたは。いつもそうなんだから、いい加減自覚しなさい。いい明奈？ あんたが死にたいなんて嘘なの。大嘘。だってあんた、今あたしが殺してやるって言ったら逃げるでしょ、そのまま殺されていいほど思い詰めてなんかいないでしょ。それなのに、死にたいなあなんてまるで同情して欲しいみたいに軽々し

く口にしないこと。本当は、あんたはね、現実逃避したいだけなのよ。やることなすこと何もかもがうまくいかなくて、自分が嫌、そして自分の目の前につきつけられた事実を受け入れるのが嫌で、自分と向き合うのも嫌だから、死ぬことでその現実から逃れようとしているの。あんた本当に愚か者よ、理想ばかり追い求めて現実は見たくなくて、しかもその現実の見たくなさが異常で、死さえも現実逃避の一手段と捉えてるんだから。現実逃避のために死ぬなんて究極につまらない死に方よ」

ヒカリはそこまで一息で言っただけ、わたしは、よくまあ、そう他人の心の中を見透かしたようにぺらぺら解説できるねとあきれ半分、もう半分はというと、なるほどと思いつながら納得していた。なんだか当たっているような気がしてならない。さすがはヒカリ、と言おうとして、ところがヒカリはわたしに一言の隙すら与えなかった、一息ついてまたしゃべり出す。

「明奈はね、もっと泥の臭いを知らないダメなの。自分は非凡な才能の持ち主だ夢を見続けていけば何でも叶うんだあたしは他の人とは違う、って、あんたいつまでそんなこと信仰してるつもりなの。自分は天才だと信じ切ってるからプライドが高くて、理想像と違う自分は絶対に受け入れない、失敗してる自分はこんなの自分じゃない偽物だ、なんて、そうやって自分の存在見失ってひとりさまよい歩いてるわけ。部活もそう、勉強もそう、あんたは自分が人よりも劣ってるを認めたくなくて、失敗するとすぐに言い訳するし、いよいよ言い訳もできなくなると勉強も部活もやめたいって言い出す。あんたね、そんなふうにしてあれもこれもやめていったら、最後には何が残ると思ってるの。何も残るわけじゃない。だってあんたが他人より優れている分野なんてないに等しいんだから。明奈はもっと真実に素直にならないといけないの。そんなふうには真実から目を逸らしていたらあんた、ずっと辛気くさいひねくれ者のままよ」

一気にまくし立てると、ヒカリは前を向いて歩き出した。暗い道を靴を背負って黙々と。わたしには彼女に後光がさしているように見えて、ヒカリの後ろについて歩き出した。颯爽。そんな言葉が似合う。彼女が一步を踏み出す度、わたしの目線より少し上のところで、川が流れるように真っ直ぐ伸びたストレートヘアが揺れる。身長を測ればわたしとヒカリは同じくらいなのに、後ろを歩くと明らかに彼女の方が背が高いのは、わたしが猫背なせいだ。卑屈に丸まっているわたしの背中に比べて、彼女の背筋はすと伸び、肩は高く、疲れていても疲れを感じさせない後ろ姿をしている。彼女のそういう姿がわたしには見惚れるほど格好よく感じられて、憧れ、けれども同時に、ぼーっとして不格好にのろのろ足を動かす自分を思うと、現実の冷たさに興醒めした。

「ヒカリ、あたしどうしたらいい？」

大股で突き進むように歩くヒカリを見てみると、自分のやっていることや言っていることがどうしようもなく幼稚に感じられて、わけのわからない焦燥感に駆られ、やり場のない恐怖心に襲われる。それからどうにかして逃れようとヒカリにすがっても、

「しらない」

と一言、冷たくそっけなく返されただけだった。わかっている。他人に自分の進む道を示してもらおうなんて甘ったれで、最低で、生きる価値もない。ヒカリに限らず誰だって、そんなどうしようもない人間に手を貸してくれるわけがない。わかっている。しかし、わたしは本当にどうしようもない人間なのだ。自分で道を拓いていくなんでわたしにできるわけがない、なにしろわたしはできそこないである。諦めているし、事実そうだとも思う、所詮わたしは凡人

だ、凡人以下だ。と、でも、そのことよりも、だったら他の誰かの生き方を真似ればいいじゃないという醜い考え方がわたしに根付いてしまっていることが、悔しくて、恨めしい。夜の感情は、そうやってわたしにたまっていくのである。

しばらくの沈黙の後、何を思ったのかヒカリがこんなことを言い出した。

「ねえ明奈、もしあんたに自分を変える気があるなら、あたしがひとついい策を授けてあげるよ。その、なんとなく死にたいな〜っていうだるい気分を消す方法。知りたい？」

自分を変える。だるい気分を消す。わたしは条件反射的に「知りたい知りたいたい教えて教えて」とヒカリに食らいついた。

「じゃあ教えてあげる。まあ、これは個人差が大きいから明奈に効くかどうかはわからないけど。その方法ってのはね、路上で一晩過ごすこと」

「……路上で一晩過ごす」

唐突にそんなことを言われてわたしは戸惑い、言葉の意味を理解してから吹き出した。

「冗談？」

わたしはうわずった声で訊いた。

「うづん、真面目」

ヒカリはごく冷静な声で言って、でも全然真面目さが伝わってこ

ない。ヒカリの言うことを信用しないわけじゃないけれど、なにしろ路上である。現実味がない。いったいどの女子高生が道路で一夜を明かすだろう。彼氏の家で、なんて子はたくさんいたとしても、まさか彼氏に追い出されたわけじゃあるまいし、路上に座り込んで一人寂しく夜を明かすなんて聞いたこともない。明らかに一線を越えている。

「あたしに、やれって？」

なんとなく怖くなって訊くと、ヒカリはいつもの感情のない声で言った。

「別に。そういう手段もあるよって言っただけで、やれとは言っていない。やるかどうかはあくまで明奈の自由だけど、でも、あたしは試してみるのを勧めするよ。本気で」

笑い飛ばす雰囲気でもないよなあ、とわたしが殊勝に黙っているとヒカリは続けた。

「あんた寝ぼけてるからさ、目を覚ますにはもってこいだと思うよ、いい機会だし、今日一晩ここでゆっくりして、頭冷やしてきなさい。それでまあ、特別何かか考えろとかやれとは言わないから、せめて黙って夜空でも眺めて、徹底的にみじめになりなさい。もちろん、勉強するのもケータイ使うのも禁止ね。黙って座って、ぼーっとしているだけでいいの。でもたったそれだけで、くだらない妄想も馬鹿な考えも消えてなくなるから。そうしたら明日にはぼっちり目が覚めて、だるさは吹き飛んで、もちろん死にたくなってる。そしてちつとは素直な人間になって、明日学校にきなさい」

わたしはヒカリを見上げて呟いた。

「死にたくなるわけ？ それだけで、ホントに？」

「ホントもホント、大人しく地べたに腰下ろしてるだけで見えないものが見えてきて、そうしたら自然と考え方も変わるから」

そう言うヒカリにわたしは口先だけ「怖いよそれ、洗脳じゃん」なんて言って内心、ぞくぞくしていた。魅力的である。楽しいでも面白いでもなく、魅力的で、背筋が沸き上がるみたいにぞくぞくする、本能的に身体が震える。性欲よりも深く強く、今現在から抜け出したくて、わたしは変化を切望している。そうして、この煩惱、このガラクタの寄せ集めのわたし、もういい加減どうにかしてくださいと勢いに任せてわたしは言った。言ってしまった。

「やる。やってみる、それ」

空洞のような沈黙がポツカリ空いた。こちらを向いたヒカリの目はがらんどろだった。

「そう、じゃあ、まあ、がんばって」

ヒカリはそう言って、まだ何か言いたそうに口を動かしていたけれど、黙って去っていった。わたしはその場に残されてひとり立ち尽くし、はきはき歩くヒカリの後ろ姿が見えなくなるまで呆然と見送った。やっぱり彼女のその姿はいつ見ても格好よくて憧れで、でも、街灯の黄色い光に一瞬、伏し目に眉をひそめたヒカリの弱々しい横顔が照らされて、それでちゃんと心が痛んだ。見なければよかった。

ヒカリの後ろ姿は小さくなって、やがて暗闇に消えた。

ブロック塀に浅くもたれ、右足を三角に立て左足をぶらんと投げ出し、両手をアスファルトの地面につけ肩を張って、ノックアウトされたような姿勢をつくってみる。そして、茫然と夜空を眺める。路地の塀と家の軒先に囲まれた細長い夜空である。長い間そうしていると目が冴えてきて、最初はひとつしか見えなかった星がふたつになりみつつになり、そのうち数え切れなくらいたくさん、見上げる空目一杯に散らばった。目を凝らせば夜空には真っ黒な雲があつて、ゴオーツという音をたてて、はるかな速さで空を流れていた。そしてその様子を、わたしは弛緩した姿勢で眺めるのだ。ひとり寂しく、こんな真つ暗な夜道に落ちこぼれて格好つけて何やってるんだろと思いつながら、でも、わたしは虚しく意地を張って、その姿勢のまま動こうとしなかった。

しかし、しばらくそうしていると、案外、格好をつくっているだけでも澄んだ穏やかな気持ちになれることに気づいた。俗っぽい濁りきった感情が緩やかな波に流されるようにわたしから剥がれ落ちていく。そうして、毎日の生活で懺のごとくわたしにこびりついていた不潔な感情が押し流された跡に、さながら真珠のような、美しいとか哀しいとかいったごく純粹な感情が洗い出されていくのがわかる。さつきまでかたくなに張っていた意地も静かに崩れて、わたしは意地でもやけくそでもない新しい気持ちで夜空を眺めることができた。道路はひやりと冷たく、静かで、空の雲だけが動いていると思うと途方もない思いで、まるで自分だけが世界でたったひとり取り残されたような気がした。

その時、頬を伝うものがあってわたしはびくりとした。透明な液体、涙が、流れていた。何かがつらかったわけじゃない、何かが悲

しかつたわけでもない、ただ感情が揺り動かされた、感動した。ここ数年間、ずっと錆びついていたわたしの根元にある感情の線が、今、ようやく震えたような気がした。

しばらく、することもないのでそうしていた。涙は後から後から流れ出し、枯れて、止まった。涙が枯れた後は抜け殻みたいにぼんやりと空に流れる雲を眺めていた。

こうしていると、からっぽになったわたしにだんだん感覚が取り戻されていく。聴覚、嗅覚、視覚。温度を感じられるようになる。途端に寒さがきわだった。十月も末である。風が吹く度に身体の内まで凍てつくようで、ずっと地面につけていた手は血が死んだように冷たくなって痺れていた。わたしは長座体前屈でもするみたいにぴんと腰を伸ばして座り直し、スカートから出た素足が地面に触れて冷たいので靴をひざの下に敷いて、かじかんだ手を呼気で溶かした。白い湯気が指と指の隙間からこぼれる。ヒカリの言いつけを少しだけ破ってケータイを開き時刻を確認するともう八時を過ぎていて、いつもは家で晩ご飯を食べている頃だなあと思うと急に不安がかきたてられた。ちよつと視線を上げると、狭い道路の両脇に並んでいる家々には窓ガラスと白いカーテンごしに黄色や赤やの光がぼんやりと灯っていて、それがちらちらと揺れ動く度、わたしは急な疎外感を覚える。そして、言い知れない恐怖に怯える。目に見えない何かに追いつめられていくこの絶望感。わたしはあまりの恐ろしさに顔を伏せ、すると、ブロック塀と道路との隙間に、ヘドロのような黒いものが乾いてこびりついた雑草が目について、ぎよつとした。ツンと鼻を覆いたくなるドブの臭い。わたしはなんて汚いところに腰を下ろしていたんだろうと気づいて、制服の裾にヘドロがく

つついているのも見えて、でも動く気はなかった。だって、わたしにはこの場所が似合っている、どうせわたしもこのヘドロとたいした違いなんかないのである。だから、今夜一晩、ここであんたたちと一緒にいさせてちょうだい、とわたしは地の底に落ちたような思いで、じつと雑草と対峙する。

ふと思いついて、ケータイで家に電話した。スリーコールでお母さんが出た。

急でごめん、今日は友達の家泊まることになった……うん大丈夫、明日の朝一番で帰るから……うん、わかった、……うん、うん、本当にごめんね。

プツ。

視線をアスファルトに落としたまま、死んだケータイを耳から離す。ケータイの光で雑草についた灰色のヘドロがくつきりと照らされて不気味だ。わたしは顔をしかめてヘドロから目を離し、背後を振り向いた。

たとえばここの家にある暖かな団欒の光。刻々と、白から赤、赤から黄色と色を変える家族の温もり。こんなもの、ってせせら笑いたくなるけれど、でもそれがウチにはない。家に誰もいないわけじゃない、仲が悪いわけでもない、ただ、わたしの両親はクールなんだと思う。もちろん愛情がないんじゃない、ただ、高校一年の娘であるわたしに気を遣って、むさ苦しくない、クールで涼しい関係でいようと努めてくれているのだ。そこまで気を遣ってくれているなんてとわたしは申し訳ないくらいの思いなのだけれども、でもごくわずか、わたしと両親とではそのクールのニュアンスの受け取り方にズレが生じている。あの人たちはわたしの世界に土足で踏み入ってこない代わりに、愛情がないんじゃないかと疑うほどわたしに無頓着

なのだ。いや、わかっている。愛情がないんじゃないやなくて、クール。そう気遣ってくれていただけで、わかっているんだけれど、でも時々、本当は愛情なんかないんじゃないかと思えてしまう。そして、そういうときは身悶えするほど苦しいのである。だって、高校一年生の娘の朝帰りを気にも留めないんだから。やっぱり、それは行きすぎている。そういう世間一般的に普通ではないことを「わかった」の一言で済まされると、家の中にさえ居場所がなくなるようで、つらい。何か間違ってるんじゃないかっていう違和感が、悪寒をともなあって背中を走り抜ける。とりわけ、今は。

ケータイを閉じると一切の明かりが消失し、ふたたび暗闇が訪れた。背中をブロック塀に預けると、ほんの数分でどっと疲れたのを感じた。頭から何からだるく痛み、まぶしいところを見続けていたせいで、目がチカチカする。誰かからメールが来ていたけれど、さすがに今日ばかりは無視させてもらった。

風が通り過ぎる。

身体の表面をなでるように這い回り細胞の隅々まで寒さが浸透していくようで、何度目かの風でわたしは寒さに耐えられなくなり、バッグからまっさらのウィンドブレーカーを取り出した。タイミングがよかった。なにしろこれは新品も新品、陸上部の冬場の練習で着用するように、と今日、一年生に配られたやつなのだ。白にブルーのラインが入っている格好いいウィンドブレーカーで、真新しい純白が月明かりを浴びて輝いていた。背中には高校名がでかかど入っている。それがずっと気に入らなくて、これじゃあ高校生の間しか着られないじゃないか、実用性に欠けると思っていたのだけれども、今は少し考え方が変わった。だからこそ、いいのである。わたしはそのウィンドブレーカーの上着に袖を通すと、前のファスナーをきっちり閉め、下もはいて、スカートを下ろした。まるで脱皮

だ。脱いだ制服を丸めて鞆の中に入った、のっそり立ち上がった。向かいの家の暗い窓ガラスに映る全身白装束を眺めると、わたしは無性にくすぐつたい気持ちになって照れ笑いだ。このウィンドブレーカーを着てトラックを走る、このウィンドブレーカーと苦しみを喜びを共にするんだと思うと、胸が熱くなり、青春なんてつまらない言葉が頭に浮かんで、でもそれがおかしくて、爽快だった。

そうして、わたしはしばらく地面に座り込んでいた。

寒さは縮こまるとやわらぐ。わたしは両手をヤドカリみたいにウィンドブレーカーの袖の中に引っ込めて、両脚はできるだけコンパクトに折り畳み、顔を腕と腕の間に埋めた。そうするとわたしの身体はスーツケースにでも収まりそうなくらい小さく小さくなった。たしかに暖かい。暖かくて、自分の温もりが身体の隅々までじんわりと染みわたって、でもその時、わたしはきつとひどく卑屈な格好をしている。道路の端っことでブロック塀によりかかって、自分の身体を抱くように丸まり、見るから陰気そうに俯いて。みじめである。自分で自分を黴臭い人間だと思う。ただ不思議と、そのことを恥ずかしく思ったりはしなかった。だってわたしは十六歳、高校一年生、まだまだ自由な年齢なのだ。今から世間体だの人様だのを考えるなんてあまりにも野暮だ、野暮すぎる。高校一年の今なら、大人にどんなに醜い、汚らしい、恥さらしだと言われたって構わないんだ。

それよりもこの躍動感。持て余した肉体の新鮮さ。溢れんばかりの滲刺さを備えながらも道路の片隅でうずくまって動けない、このギャップ。

ああいう生き方をしようこういう生き方をしようと毎日毎日、結局生き方なんて決められなくて、ただ漠然と流れゆく時間、わたしは身体だけどんどん成熟し大人になっていく。顔つきが女の子から

女性になって、胸もお尻も身体のかたちも、中学生のころは棒きれみたいに痩せていたのが、いつの間にかふっくらと肉がつき、女の人になっていく。それが嫌でダイエットしても成長力には勝てなくて、もうどうしようもない、手もつけられない、わたしは子供のままではいられなくなってしまった。

未練があるんだと思う。十六歳って微妙な年齢だ。大人につながる窓口でわたしは立ち尽くし、過ぎ去った日々を振り返っては、ちよっと前を向いてため息をついている。だって、前には真っ暗な道が続いているだけ、希望も何も無い。あるのは不安と恐怖ともろもろの陰鬱な感情ばかりで、そんなにふうにして降り積もった負の感情の残骸は、もはやわたしひとりでは背負いきれなくなってしまった。だったらわたしは毎日何をやっていいるんだと言っても、自信を持って答えられるようなことなど何も無い、ただ行き当たりばつたりで生きながらえているだけで、恐怖。怖くてたまらないのだ、未来というものがこの落ちぶれた生活の先に感じられないことが。ヒカリの毅然とした面持ちを見ていると、よけいにそう思う。

だったら、そのままでもいいんじゃない、なんて、ふっと思った。今までにまったくなかつた新しい発想である。でも、いいかもしれない。今はそういう時期、真っ暗でどんより曇った時期で、でもそれはそれでかけがえのない日々なんだって考えれば。別に今のままでいいじゃん、セイシユンじゃん、とわたしは自分に言い聞かせる。目が暗闇に慣れて、夜の底が少しだけ明るくなった。

男の人の声で目を開けた。目蓋を少し持ち上げて薄目になると、とたんにまぶしい光が眼球を貫き、冷たい外気が侵入してきて、目

が痛む。わたしを照らし出しているのは黄色い懐中電灯の光。そしてそれを握っているのは、おそらく二十代前半の、スラリと長い鼻が特徴的で、外国人みたいに彫りの深い顔の男の人だ。警察ではなさそうだけれど、こんなところでこうしている以上、声をかけられるのは予想していたことだったので、わたしは身体を固くして身構えた。

「こんばんは」

相手の礼儀正しい挨拶にわたしも「こんばんは」と心の中で呟いて、でも表情は警戒心丸出しで、彼を値踏みするように上から下まで睨みつける。

「君、高校生だね。こんなふうにとひとりで地べたに座ってるのはどうしてかな。もしかしてこうすると悟りでも開けるのかい？」

「別に」

わたしは彼から目を逸らし、息を吐くようにそっけなく答えた。それでも彼は好意的にわたしに話しかけてきた。

「じゃあ、家まで帰るのに疲れたからちょっと休憩してるわけ？」

「違う」

「じゃあ、自分の家がどこにあるのかわからなくなったのかな？」

「そういうわけでもない」

「じゃあ、家がないんだ。家がなくてどこにも帰れないから、ここに座ってるんだ？」

「あ……そーなんだよ。そうそう。ホームレスなの、あたし」

わたしがそう言うと、彼は笑って、「へえ、そうなんだ。じつはさ、俺もそうなんだよね、ホームレス。お似合いじゃん」と言った。

彼が笑うと世界が震える。世界の震えはわたしにも伝わって、身体が小刻みに揺れる。悪くない奴だ、と思った。こういうバ力な大人は、安心する。

「ホームレスのくせに、懐中電灯なんか持つてるわけ、あんた」

「まあね、やっぱり夜に出歩くときはこれがないと安心できないってかさ、怖いじゃん、暗いと、襲われそうで。最近オヤジ狩りとか、ホームレス狩りとかあるでしょ？」

わかる。気持ちはわかるけど、狩っている連中は猛獣じゃないんだから、懐中電灯を持ち歩いて明るくしていれば襲われないというわけでもないだろう。

「それだけじゃなくてさ」

彼は言った。

「何と云うか、自分を保つていう意味合いもあるんだよね、この懐中電灯。暗い道を歩いているときに明かりがないのって嫌なんだよ、俺。夜だと、暗くて薄気味悪い細い通りとかよりネオンサインとかガンガンに光ってる賑やかな大通りの方が好きなタチでさ。ホームレスのくせに。暗くて静かな道をひとりぼっちで歩いてると、自分がすぐくみじめに思えてくるんだよ。泣けてくるんだよ、悲しくてさ。もちろん、俺はホームレスで薄暗い世界の住人なんだけど、どうしてもそれを認められなくて、それで明かりというか光がないと安心できないんだ。俺さ、ホームレスになる前は夜に寝るときも部屋の電気つけっぱなしだったんだぜ。むしろ暗い部屋だと不眠症になっちゃってさ」

と、そんなことを彼は一息に話した。それを聞きながらわたしは

虚しくなり、やはり彼もわたしも、そしてヒカリもみんな同じだと思った。みんな、この世の中で自分というものを持って余し、困り果てている。そして限りなく降り積もる不安や恐怖を、他人に分かち合ってもらいたくて仕方がない。みじめだ、わたしも彼もヒカリも、そういう人間はみんな、目を背けたくなくなるくらいみじめなんだと思う。わたしだって今、顔を歪ませて目をうるうるさせて、いったい誰がこんな醜い顔を好きこのんで見たいだろう。

でもただひとつ、本当にたったひとつだけ、彼とわたしとでもっと言うならばヒカリとわたしとで 何かが違うとしたら、それは、わたしは自分がみじめだということを受け入れられるということだろう。泣きそうなほどつらくても、わたしは自分がみじめだという事実を、彼のように必死にねじ曲げようとは思わない。自虐、とはちよつと違う。それに快感を感じているわけではないのだ。気持ちいいわけがないみじめなんだから、でも、別にみじめだっていじじゃん、と思えるようになった。そして、大人になってもまだ自分がみじめだということを受け入れられない彼を、わたしは心の底からざまあみろと思うのだ。それこそ快感で、このうえなくすがすがしい。

「ねえ、あんた、いったいあたしに何を言いにきたの？」

「ああ……さあ、何だったっけ」

困ったように眉を歪め、頭にぱりぱりと掻く彼。彼の弱っている姿は見ていて気味がいい。

「ねえ、だったらちよつと散歩しようよ。ていうか、あたしの散歩に付き合っつて。ずっと座ってたからさ、腰とかお尻とか、そこらじゆう痛くっつて。散歩しようよ」

彼はますます弱った顔になった。

「散歩って、この夜中に？　しかも俺とふたりで？　それはやめといたほうがいい。明日、まだ明るいうちに友達と行けばいいじゃないか」

「やだ。明るいときの散歩なんていつでもできるんだから、つまらない。真っ暗な夜中に散歩するからこそかけがえないでしょう。こんな機会、そうそうないよ。ね、それにさ、あたしあんたのことも知りたいから、歩きながらいろいろ話そうよ。お互い、ホームレスの話とか。ねえ、いいでしょ？」

そう言っただけでわたしは彼にすり寄って甘えかけた。上目遣いに彼を見上げて、彼の胸板を優しく撫でて、とろけるような声を出して、これじゃまるでソープ嬢だ。しかも相手は知り合って五分と話していない年上の男の人ときた。でも、わたしは必死だった。気持ちを共有したいわけじゃない、彼に手を差し伸べたいわけでもない、でも、わたしは必死だった。彼を蹴落とすために。

「しょうがないなあ」

女子高生にすり寄られるのが嫌だったのか、それとも下心が芽生えたのか、彼は困り笑顔でわたしに付き合ってくれた。とにかく、いい人だと思った。人間として好意的な人で、たぶん、もつと前に出会っていたら、わたしは必死で彼と仲良くなるうとしたらだろう。でも今はそういうわけにはいかない。わたしは彼に精一杯心をこめた笑顔を返して、鞆を手に取り、眼差しを鋭くして夜道を見据えた。灰色の冷たい道である。「イチニツイテ」と心の中で呟くと、血潮の燃えたぎるのがわかる、心臓が高鳴る。学校名入りウインドブレーカーが気分を盛り上げた。「ヨウイ」でわたしはスタンディングスタートの姿勢をとる。彼が急に立ち止まったわたしを振り返った。

全身の筋肉がピンと緊張し、エネルギーを凝縮させていく。自分が力がみなぎるのが実感できる、この瞬間をわたしは愛している。

パン、とピストルが鳴った。同時に、弾かれるようにわたしも飛び出した。力の爆発、そして拡散。夜の冷たい風に真正面から切りかかっていく。後ろに置き去りにされた彼はどんな顔をしているだろう。どうでもいいことだ、だって彼が走っても絶対にわたしには追いつかない。そしてわたしは走り続ける。もちろんわたしも彼もホームレスだけれど、わたしにはまだ帰るべき場所がある。

わたしは闇夜の底を駆け抜けていった。

(後書き)

夜ってやっぱり特別な雰囲気があるように思います。個人的には夜は好きですが。感覚が研ぎ澄まされるみたいで。

感想・評価くれると本当に助かります。辛口の見解でも遠慮しなくていいです、どんどん書いて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2576j/>

夜道

2011年1月26日11時23分発行